The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	我がデザインの年輪
Author(s)	樋口, 治
Citation	デザイン理論. 1978, 17, p. 54-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53739
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

我がデザインの年輪

樋　口　　治

私はデザイン歴は，戦前・戦中・戦後を通じて何時の間にか40余年になった。今，それらを振り返ってみると，自分の作品の中にその時代の息吹きが反映していることがよくわかる。いささかおこがましいが，ここに戦後約20年間の作品を二三挙げて，その時々のデザインの傾向を年輪として視てみたい。

1．戦後日本デザインの側向

作品A，「曲木の肘掛椅子」

1960年（昭和35年）発表

発売　株式会社高島屋

製作　飛弾産業株式会社

材質　ぶな材曲木加工，椅子張の充填材は発泡ウレタン，裂地は平織ワインレッド色

1961年　大阪デザインハウス第一回年度賞受賞作品

第二次世界大戦後の我が国のデザインは極めてノーマルな機能主義の道を辿った。昭和23年小池新二や勝見勝氏らによるデザイン立国論以来，バウハウスが見直され，ピース箱のデザインや国際的デザイン盗用問題が話題となり，や

がてインテリア・デザインの分野ではスカンディナビヤ・デザインブームと伝統的日本調が横行した。

この肘掛椅子も今から見ると，明らかにそれらの影響を受けているように思われる。当時高島屋では「シャンブル・シャルマント展」が始まり，インテリア業界のパイオニアたらんとして極めて積極的大規模な催しが企画された。私はそのプロデューサー的立場にあり約80名の企業内デザイナーを統率していたが，自らも製作意慾やみがたく，優れた木工技術でありながら，当時等閑視されていた曲木技法をモダンデザインに生かすべくデザインしたものである。

この椅子が発表された1960年は，安保に倒れた岸内閣の後を受けて池田内閣が発足し，国民所得倍増計画が発表され，大量生産・大量消費期が始まり，投信ブーム・株価急騰の岩戸景気全盛期であった。日本における家具の量産化もこの時期に始った。危しげな様式家具の模倣や，いじけた今日の量産家具のデザインをみると，手前味噌ではないが，こういう初期の量産家具には大らかな創作性があったように思われる。

2．高度経済成長のシンボル

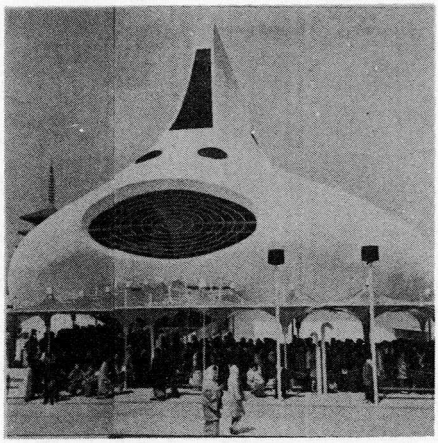
作品B・EXPO'70「ガス パビリオン」

昭和45年

1970年日本万国博覧会協賛

施主　日本ガス協会

施工　大林組



私としては，建築の基本計画からインテリア迄，全ての造型を委せられた思い出深い作品である。

EXPO「70」会場建設費2000億円，関連公共投資9000億円，計1兆1千

億円の投資は今日の貨幣価値に換算すれば2兆円に近い大プロジェクトであったが，56ケ月も続いた「いざなぎ景気」の頂点，高度経済成長のシンボルとして千里丘に出現したこの未来都市は，国内の各種のデザイナーに千載一遇のチャンスを与えるものとして彼等を欣喜雀躍せしめたものであり，そしてこの年の春の18.3%賃上げに浮かれた日本民族によってＧＮＰ世界第二位の偉大なる祖国の繁栄を謳歌する格好の場となった。

私のデザイン・ポリシーは「笑い」をテーマとしたこのパビリオンを，完全に“お祭り概念”で貫くことであった。無垢(むく)の笑いには堅苦しい理論や超近代的な実験建築は不要であり，むしろＣＩＡＭ以来の現代建築論や現代デザイン理論からかけ離れた別個なもので挑戦してみようということであった。

この狙いが正しかった間違っていたか，或いはその表現技術が正鵠を得ていたかどうか私には判らない。ただこのデザインを完了する暇もなく，南仏ニースに飛び，この館の壁画作者であるホアン・ミロにオンダシオン・マーグでこの案を見せたとき，口を極めて彼が評価してくれたことだけは確かである。そして彼が来日したときにハプニングが起った。私が設計したこのパビリオンの長いゆるやかなスロープの白い手摺りに，彼が突然絵を描き始めたのである。30米程の長い手摺りに，彼はお座敷帚と亀の子束子(たわし)とオイルペイントを使って一週間程で素晴らしいタブローを作り上げた。それは現在国際美術館の大広間に飾られている陶板壁画より私には清新に思われた。極めて残念なことに，それは僅か半年で消え去った。パビリオンと共に細々に砕かれたのである。

ミロの作品のみならず，半年の華麗な祭典の後，未来都市は幻のように消え，千里の会場は今再び緑の丘に戻っている。

それと共に日本の高度成長も今やそのおもかげをしのぶべくもない。

まことにこの作品は，私にとって華やかな高度経済成長の一場の夢となって散り去った感がする。

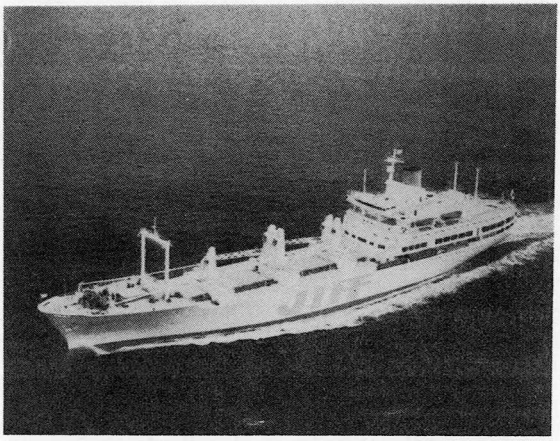
3．デザイナーの分野拡大

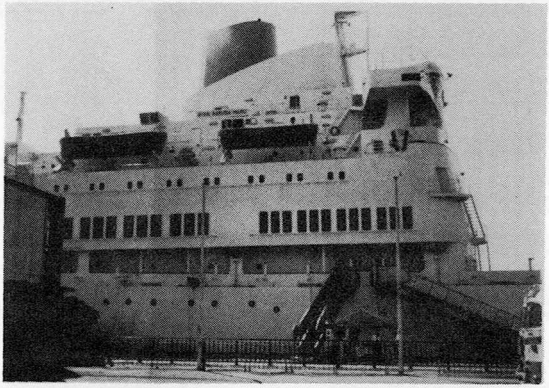
作品C・「新さくら丸」のデザイン

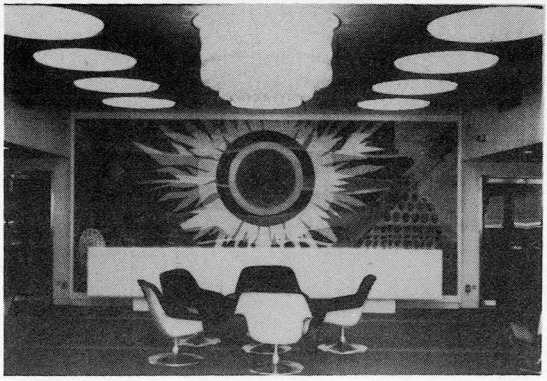
1972年（昭和47年）7月完成

船主　社団法人日本産業巡航見本市協会

建造　三菱重工業株式会社神戸造船所







日本産業巡航見本市協会はさきに専用船さくら丸（その後青年の船に転用された。）を所有していたが，船体老朽化のため新鋭の代船「新さくら丸」を建造した。

計画は1970年に始まったが，時はまさに第3次佐藤内閣，ＥＸＰＯ'70と同期の高度成長のまっただ中であり，この船はその時代層を反映して極めて豪華で力強い格調を目標とされた。

この船の建造計画で注

目すべきことは，「新さくら丸デザイン委員会」が組織され，造船技術者と別個に船体から内装の隅々までデザイナーの目で独自に検討され，それが尊重されて大巾に採用されたことである。メンバーは下記の通りであった。

I・Dデザイナー	豊口克平
I・Dデザイナー	秋岡芳夫
グラフィックデザイナー	伊藤憲治
インテリアデザイナー	樋口　治

デザイナーが船の外形迄取り組んだのは日本で最初のことで，船主のデザインに対する理解度の高いこともさりながら，デザイナーの分野拡大は遂にここ迄きたかと，一同感慨を新にしたことであった。

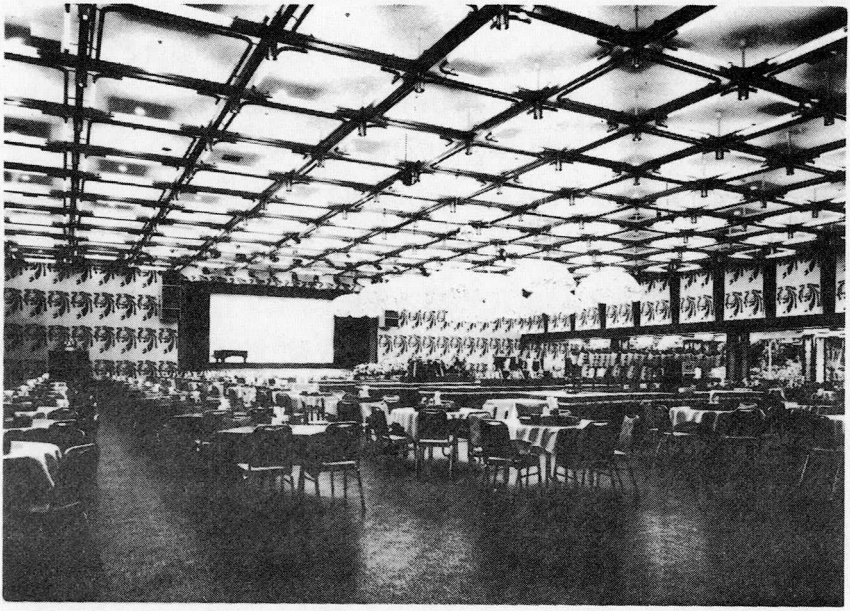
当時クィーンエリザベス2世号が建造されたばかりで，その船体設計に英国の工業デザイナーが関与している情報が入っていたので，我々チーム全員が張り切ってデザインに取り組んだのである。

船体塗色をグラディエイションや縞柄にする等，新しいアイデアが生れたのもこの時である。ナビゲーションブリッジに下駄をはかすこと（航海船橋の下に空間を設けて風を後へ通し，煙突の煙を後甲板に落さぬよう配慮する。）やセミ・マッグ式に煙突とマスクを連結させる造形などは我々デザイナーの提案が採用されたものである。

三菱神戸造船所にこの船のキールが据ってから，具体的なインテリア・デザインは全般に渉って私が擔当した。船の使命上，現代日本調が中心となったが，私が当時の世界最大の豪華船クイーンエリザベス2世号のインテリアを意識しなかったと云えば嘘になるが，この船が完成した翌1971年夏，私は大西洋上でクイーンエリザベス2世号の客となったが，デザインの傾向が「新さくら丸」と全く異ることを実地で確かめたのもこの時である。その後我が国でも数多くの容船的フェリーボートが出現したが，船の格調・デザインの質及びそれにかけた予算が全くお話にならず，「新さくら丸」は現在も尚日本のフラッグ・シ

ップの地位を保っているものと思っている。

4．低成長期の省力化の象徴



作品D・「杉乃井ホテル大集会場」　1977年（昭和52年）5月完成

施主　別府市観海寺　杉乃井ホテル

施工　直　営

内容　大集会場（1600㎡），中・小集会室，ホール他

1978年（昭和53年）度日本照明学賞受賞

最も新しい作品例としてこれを挙げたい。これはリゾートホテルでは日本で一二を争う杉乃井ホテルが昨年新しく建造した大集会場である。40米四方の柱のない1600㎡，しかも，6.5米の天井高を持つ空間は流石に巨大である。この大きさは東京帝国ホテルの孔雀の間に匹適するものであり，舞台，コントロール・ルーム，同時通訳室を備え国際会議場にもなる機能をもっている。収容人

員２千名は確実であるから当然防火規定は極めて厳しい。従って意匠的には不燃板の表面を不燃材で貼ることに限られてくる。最終的に私は「束ね熨斗」という日本独特の華麗な染織模様を大柄に表現した特別製の壁布で部屋全体を囲った。

この作品で特色とすることは，上記のような意匠はも早や問題でなくなったことである。壁床天井の意匠は当方の提案そのままを施主は直ちに承諾する。これは永年施主とつき合った結果の相互信頼がそうせしめることもあるが，問題は照明効果と音響効果並びに空調冷暖房効果と，それ等が防火・防災と噛み合う点にあり，施主の関心もその方のみに働いたからである。要するにこれ等が一つでも機能を果さないと意匠がいくら優れていてもそのインテリアは落第ということである。音響効果一つとっても，私はその道のベテラン……この場合，ＮＨＫ東京渋谷の放送センター大スタディアムの音響計画設計者から種々意見を聞いてインテリアデザインはそれに従うという方策をとった。照明計画は白熱灯と蛍光灯とフラットランプのカクテル照射方式を採用したが，ここでも今迄考えなくてもよかった危介な問題がでてきたのである。云く電力の省力化がそれである。この設計は本年度の日本照明学会の年度賞を受賞したが，それは照明意匠の卓越性に対してではなく，この種の照明計画が従来行われなかった省力化を真剣に考慮していることに対してであった。

以上，機能主義デザインから，使い捨て豪華デザインえ，そして三転して遂に省力化に対応する迄，私の拙い作品を通じてさえ，我々の周囲が激しく転換していることが判る。

我がデザイン，果して今後どういう年輪を刻むことやら……。